

学 生 海 外 研 修 報 告 書

鹿児島大学長 殿

【授業担当者】

所属/職名： 農学部/准教授

氏 名： 高山 耕二

授業科目名	国際協力農業体験講座特論
研修先	ミャンマー連邦共和国・南シャン州インレ地域
研修期間	令和元年9月13日～令和元年9月23日
<p>【研修の目的・概要】</p> <p>本講座は農林業を通じた『国際協力のあり方』を学ぶものである。事前講義を通じて渡航先の情報を得るとともに、日本の現状を知ったうえで渡航研修を行う。さらに、帰国後は帰国報告会での発表およびレポートの取りまとめによって理解を深める。</p> <p>渡航研修では、NPO「地球市民の会」が活動している農村やインレ湖を訪れ、教育問題、水問題、農業問題について調査・意見交換するとともに、文化交流を図る。</p>	
<p>【研修の成果】 *事前学習も含む。地域のグローバル化や活性化に資する人材育成についての成果も記載してください。</p> <p>受講生は、実際に渡航していろいろなことを見聞し体験することによって、「現地に行かなければ分からない」ということを実感した。また、本講座の受講生は元々好奇心旺盛で積極的な資質を有していると考えられるが、相手を理解するためには相手の中に入りコミュニケーションを取ることが大切であることを実感し、研修が進むにつれて積極的に行動し、質問するようになった。こうした経験は地域の活性化に資する人材育成の面で大きな成果と考えられる。</p> <p>今年度は、NPO 地球市民の会（TPA）の鈴木氏の案内でミャンマー連邦南シャン州インレ湖流域の農村を訪問し、『畜産分野における国際協力のあり方』をテーマに研修を行った。渡航前研修では、鹿児島県内の1)ウシと2)ブタの生産現場、さらには3)両者のと畜場を見学（7/15、8/9、8/26）し、日本畜産の優位性（生産効率の高さや食肉処理における衛生管理）を学び、これをベースに現地での聞き取り調査を行った。現地では、ウシやブタの飼養実態について生産者への聞き取りを受講生自身が行い、両者のと畜の現場や食肉の流通実態についても調査した。受講生の多くは、ミャンマーで営まれている畜産について生産効率や衛生面で劣っているのでは？という先入観を持って調査をスタートした。しかしながら、調査を進める中で受講生は現地で営まれる小規模かつ粗放的な畜産に日本とは異なる意味での合理性（未利用資源の飼料利用や物質循環）があることを見出し、日本の畜産技術や衛生概念を単純に導入することが現地で必ずしもプラスに働かないことを理解した。その一方で、知識不足を原因とする伝染性の動物疾病の放置や間違った投薬（ヒト用抗生物質の使用）の実態を知り、現地に足を運び、そこに住み人々と触れ合う中ではじめて必要とされる国際協力のカタチが見つけ出せることを学んだ。</p> <p>現地での滞在中は、ほぼ毎晩学生とともにミーティングを行った。その日の研修内容について確認するとともに各人がその日に感じたことや疑問をぶつけ合うことで時には激しい議論をすることも出来た。加えて、本研修を通じて学生は『国際協力』について学ぶだけでなく、ミャンマーの人たちの生き方を知ることにより、改めて日本や自分自身の生き方を見つめ直すきっかけとなったようである。</p>	
<p>【今後の課題】</p> <p>滞在中に体調を崩す学生は見られなかったものの、海外渡航の緊張感や早朝からの農作業などから疲労を蓄積しているケースも考えられたため、適宜休息の時間を設けるように配慮した。引率教員は学生の体調に十分に目を配り、体調不良の発生を未然に防止する必要がある。</p>	